照）．以下に各属の特徴を述べる．

1. *Notocelia* HÜBNER. 雄前翅に costal fold, 雄後翅に通常 dorsal fold をもつ．Valva の basal opening の縁に clasper をもつ．Aedeagus の vesica に通常2本の固定された太短い cornuti をもつことにより他の2属と区別される．雌交尾器の ostium は第7腹板内に入り込まない．

2. *Epiblema* HÜBNER. 雄前翅に costal fold をもつ．Valva に clasper をもつ．Ostium は *Notocelia* 属同様，第7腹板内に入り込まない．

3. *Eucosma* HÜBNER. 雄前翅に costal fold をもつものは *Eucosma* 亜属，もたないものは *Calosetia* 亜属に属する．Valva には clasper がなく，ostium が第7腹板内に入り込んでいることから他の2属と区別される．

——日本産 *Eucosma* グループの種——

Notocelia nimia FALKOVITSH
rosaecolana (DOUBLEDAY)
sp.
Epiblema autolitha (MEYRICK)
foenella (L.)
incospicua (WALSINGHAM)
macrorris (WALSINGHAM)
pryerana (WALSINGHAM)
quinquefasciana (MATSUMURA)
rimosana (CHRISTOPH) (=*rotundana* SNELLEN)
sugii KAWABE
Eucosma (*Eucosma*) *cana* (HAWORTH)
confunda KUZNETZOV
denigratana (KENNEL)
discernata KUZNETZOV
expallidana (HAWORTH)
niveicaput (WALSINGHAM)
sp.
(*Calosetia*) *abacana* (ERSCHOFF)
aemulana (SCHLÄGER)
aspidiscana (HÜBNER)
campoliliana (DENIS & SCHFFERMÜLLER)
catharaspis (MEYRICK)
glebana (SNELLEN)
maritima (WESTWOOD & HUMPHREYS)
metzneriana (TREITSCHKE) (=*intacta* WALSINGHAM)
rigidana (SNELLEN)
striatiradix KUZNETZOV

10. 近年わが国で採集され始めたニセタマナヤガ *Peridroma saucia* に関する知見

渡 辺 一 雄 (近畿)

ごく近年まで東亜から確実な記録を欠いていたニセタマナヤガ *Peridroma saucia* が，1975年以後，西日本を中心に採集され始めた．演者は，1977年7月以降，兵庫県六甲山上，標高 780 m の地点で採集を行ってきたが，これまでに51頭の本種を採集しているので，この標本をもとに個体変異および同定の問題を検討し，あわせてわが国における採集記録を整理して本種の動態に関する考察を行った．

1. 前翅の色調から紫黒色型と黄褐色型の2型にわけられた．紫黒色型は f. *saucia* HÜBNER に，黄褐色型は f. *margaritosa* HAWORTH に同定される．

2. 前翅の翅型には細長型と幅広型があるが，この変異は連続し，他の形質，たとえば色調の2型，大きさ，性，あるいは発生（採集）時期などと，現在の所，相関を見出すことはできなかった．

3. わが国の採集例は，青森の2例を例外として四国，近畿に集中し，九州および関東地方を中心とする広い地域からはまだ記録されていない.

4. 欧米では移動性鱗翅目として有名な本種は，近年わが国に侵入を始めたと考えられるが，その侵入方法については，自力飛翔に基づく分布拡大と，人為的な移入（持ち込み）との両面から，注意深い検討が必要なことを指摘した.

5. わが国では冬期にも採集されているが，本種が一時的にもせよわが国に定着し，越冬しているのか，あるいは連続的な侵入，移動がおこっているのかは不明である.

6. 本種は，顕著な移動習性を持ちながら，幼虫は極めて多食性であることが知られている．地史的に新しく，蝶類ではほとんど固有種を生じていないハワイ列島で，本属の近縁種がめざましい適応放散を示し，多くの固有種を生じている興味深い事実を指摘した.

11. 房総ヤマキマダラヒカゲの生活史——とくに生理的特性について 谷　晋（関東）

ヤマキマダラヒカゲ *Neope niphonica* は，関東およびその周辺地域においては標高 4～500 m 以上の山岳地帯を中心に分布し，平野部には生息していないとされていた．しかし青山 (1977) により，房総半島の清澄山を中心とする低山地 (25～290 m) に本種が分布していることが明らかになった．さらにこの房総産ヤマキマダラヒカゲは他地域産のものとは明らかに異なる周年経過を示している．第1化の成虫は他地域産のものより1ヶ月早く4月中旬に出現するのに対し，第2化は8月中旬と他地域のものよりむしろ遅れ気味に現れる．つまり，この間の第1世代の幼生期が他地域産のものと較べて明らかに長いと思われる．そこでこのような発育の遅れがどの発育段階で起こるのかを明らかにするために，1978～9 年にわたって本種の飼育実験を行った．その結果，卵および幼虫の発育には特に差異は認められなかった．しかし，蛹期は各飼育温度 (16, 19, 22, 25°C) において 30～40 日ほど他地域産のものと較べて多くの日数を要することがわかった.

これらの飼育結果をもとにして本種の房総半島での第1化の最盛期と思われる5月1日を産卵日とし，それ以後の幼生期を推定してみると第2化の成虫の羽化は8月17日前後となり野外における観察とほぼ一致している．そこで，おそらく野外においても，このような生理的差異がこの特有な周年経過を引き起こしていると考えられる．またこのような長い蛹期を持つことが房総半島のような低標高地の気候に適応して生活をしていく上に必要であったとすれば，逆になぜ他地域産のヤマキマダラヒカゲが平野部に分布を広げることができないかという問題に対する1つの重要な示唆を与えていると思われる．このように特有な生理的特性をもつ房総産ヤマキマダラヒカゲは，いわば生理的亜種とでも呼べるような存在であると考えられる.

12. 千葉県房総半島のヤマキマダラヒカゲ 高橋　真弓（東海）・青山　潤三（近畿）

ヤマキマダラヒカゲは，本州中部では主として冷温帯（ブナ帯）に分布しており，関東平野には見られないが，関東南部の房総丘陵に孤立した分布地域がある.

房総丘陵のヤマキマダラヒカゲは，形態・斑紋に特徴が見られ，全般に小型で，前翅の形は前後に長く，表面および裏面の色調が明るいことなどで他の産地のものと区別できる．生態的には，メダケ・ネザサなどのメダケ属の植物を食しているのが著しい特徴で，他の産地で，ササ属あるいはスズタケ属を食しているのと対照的である．成虫の行動にも他の産地のものとのあいだに一定の差異が見られる．また，他の産地のものに比較して，春型の羽化期が早いにもかかわらず夏型の羽化期が遅く，そのさい夏型となる個体の幼生期の発育期間が著しく長くなる．これは温暖なる気候への適応の結果と考えられる.

房総半島のヤマキマダラヒカゲは，種の基本的特徴を保持しながら，他の変異しやすい形質ではサトキマダラヒカゲに似る傾向が強く，この事実は種の進化という意味から興味が深い.